



・ドリルパークを活用した現在地の可視化とデータを基にした学習目標の自己設定
・テストパークの結果と学習ログ（Mathログ）を「目標設定／中間評価／振り返り」に活用し、自己調整の質向上とサイクル化

活用背景・ねらい

学習指導要領で重視される「主体的に学習に取り組む態度」、特に自己調整力について、具体的な育成方法が教師間で共有されにくく、指導が経験や感覚に依存しているという課題があった。従来の授業では、学習成果はテスト結果として示される一方、学習過程を振り返り、次の行動を自ら調整する機会が十分ではなかった。そこで本実践では、自己調整力を「**目標設定→実行とモニタリング→自己評価と省察**」のプロセスとして捉え、ドリルパーク・テストパーク・学習ログ（Mathログ）によって得られる**学習データを基に、生徒自身が学びを可視化し調整できる授業づくり**をねらいとした。

成果・効果

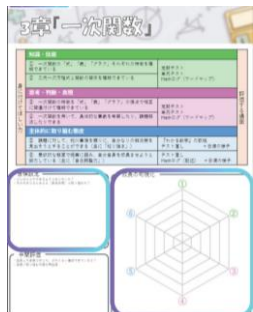
正答率や取り組み履歴などの学習データを基に振り返ることで、生徒が感覚ではなく根拠をもって課題を捉え、次の学習行動を考え自己調整する姿が明確に見られるようになった。学習ログの記述内容は「点数が低かった」といった結果のみの記述から、「**どの内容でつまずき、次に何をするか**」といった**具体的な省察へ**変化した。即時フィードバックにより振り返りは形式的な作業ではなく、次の学習につながる実感を伴うものとなり、自己調整力の質的向上が見られた。教師側も、クラス正答率が概ね60%未満なら復習重視へ切り替えるなど、**データを根拠に授業構成を調整**し、学年内共有や他教科への展開も進んだ。

授業・取り組みの流れ

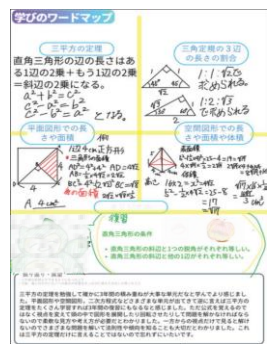
- ①目標設定（単元導入時）：紙で行っていたレディネステストをドリルパークに置き換え、生徒一人ひとりに個別最適化された課題を提示する。生徒はこのレディネステストに取り組み、正答率や解答履歴から自身の現在地と単元のゴールを把握する。生徒は**学習ログ（Mathログ）に「どの教材を、どの順で、どの程度取り組むか」を行動目標として記述**する。教師は巡回し、抽象的な意気込みではなく行動が具体化するよう助言する。
- ②授業の実施・調整（前半）：クラス全体の正答率が概ね60%未満の場合は既習事項の復習を重視するなど、ドリルパークのデータを基に授業構成を調整しながら授業を行う。
- ③中間評価（単元中盤）：単元中盤の授業冒頭20分程度、テストパークで「知識・技能」領域を測定する。生徒は**即時返却される結果を数値やグラフで確認し、自身の理解度を客観的に把握**する。教師は点数そのものではなく課題の所在に着目するよう助言し、生徒は学習ログ（Mathログ）にこれまでの取り組みを評価し、目標や学習方法の修正点を具体的に記述する。**データを基に学習を見直すことで、自己調整の質を高めることを目指す。**
- ④授業の実施・改善（後半）：ドリルパークやテストパークに蓄積された取り組み履歴や正答率の推移を基に授業改善を行いながら授業を実施する。
- ⑤振り返りと構造化（単元まとめ）：単元中盤と同様にテストパークを実施し、理解度をデータで把握した上で振り返りを行う。加えて、学習内容を整理するワードマップを作成し、知識の構造化と俯瞰的理解を促す。**学習ログ（Mathログ）と学習データを行き来しながら省察するサイクルを通して、生徒が自分の学びを主体的にマネジメントする状態**の定着を目指す。



①単元導入時の説明



①学習ログ（Mathログ）例



⑤ワードマップ例